古文を読むために　6

このコラムでは敬語を扱っている。敬語はなかなかやっかいなもので、生徒にも苦手意識を持つ者が多いが、ある程度の体系を身につけさえすれば、かえって古文を読解するのにこれほど役立つものもない。仕組みを理解し、特に人物関係を読み解く鍵にするようにしたい。

1 敬語

話し手が、話題の人物や物、また、聞き手に敬意を表すために、普通（これを常態という。）とは違った言い方をすることがある。これを敬語という。古文に描かれた世界は厳然とした身分制が行われていた世界である。人々も身分の差を意識して生活していた。そのために、古文の中には頻繁に敬語が登場する。敬語によって相手との関係性をはっきりさせることが重要なことなのである。我々も敬語によって人物関係が理解されたり、隠された主語などが敬語によって類推されたりできるのである。

敬語の形式として、「叡慮・玉体・御感・御覧」（以上、尊敬語）「拙者・愚僧・下官」（以上、謙譲語）などの接辞の付いた名詞、「給ふ・おほす・おはします・のたまふ・召す」（以上、尊敬語）「申す・いただく・たまはる」（以上、謙譲語）などの動詞、「たまふ・めす・…なさる」（以上、尊敬語）「…あげる・お…する・…していただく」（以上、謙譲語）などの補助動詞、「る・らる・す・さす」などの助動詞がある。

敬語を捉えるには次の三点を押さえる必要がある。

1　敬語の意味や種類。
2　敬意の主体は誰か。
3　誰への敬意を表しているか（敬意の対象）。

◎敬語の種類

まず、敬語の種類だが、尊敬語・謙譲語・丁寧語の三種類を見分けることになる。尊敬語は為手尊敬語・主体尊敬語、謙譲語は受け手尊敬語・対象尊敬語、丁寧語は聞き手尊敬語・相手尊敬語とも言われる。この名称によって敬意のあり方から敬語を見分けることができることが分かる。つまり、敬語の種類を参考にすると敬意の主体や敬意の対象を考えやすい場合もある。

敬意の主体と敬意の対象は次のような関係になっている。

敬語の種類	敬意の主体	敬意の対象	基本的な訳語
尊敬語	話し手 書き手	動作主（…が）に当たる人物	（お）…なさる お…になる
謙譲語	話し手 書き手	動作の及ぶ相手（…を・に）に当たる人物	（お）…申し上げる
丁寧語	話し手 書き手	聞き手 読み手	です・ます ございます

いずれの敬語も、誰からの敬意を表すかは、会話文か地の文かを手がかりに考える。

・会話文→その会話の話し手からの敬意。

・地の文→その文章全体の話し手・書き手からの敬意。

敬語は代表的なものを覚えておくと役に立つが、その際に注意を要するものがある。

◎敬語の表現方法

その動詞本来の意味を失い、他の動詞に付いて、ある意味を添える動詞を**補助動詞**という。これに対して、本来の意味で用いる動詞を**本動詞**という。

1　侍り・候ふ
　①「仕ふ」「あり」「をり」の謙譲語（本動詞）
　②「あり」「をり」の丁寧語（本動詞）
　③　丁寧の補助動詞
2　給ふ（賜ふ）
　①「与ふ」「授く」などの尊敬語（本動詞／四段活用）
　②　尊敬の補助動詞（四段活用）
　③　謙譲の補助動詞（下二段活用）
　　＊　聞き手に対する謙譲として会話や手紙の中にだけ用いられる。奈良時代には種々の動詞に付いたが平安時代には「思ふ」「見る」「聞く」「知る」の四語にだけ付く。
3　参る・奉る
　①「行く」「来」の謙譲語・「与ふ」「贈る」の謙譲語
　②「飲む」「食ふ」「乗る」「着る」などの尊敬語

これらの語は複数の語義からどのような意味・用法で使われているのかを判断しなければならない。活用の仕方や前後の文脈などから判断する。また、丁寧語は1の②③の「侍り」「候ふ」だけなので、初めに頭に入れてしまったほうが分かりやすい。

◎注意すべき敬語表現

●二重敬語（最高敬語）　尊敬語を二重に用いて、特別高い敬意を表す。地の文では天皇・皇后などに敬意の対象が限定されるので、主語を判断する際に有力な手がかりとなる。主な形には次の三つがある。

(i)　尊敬の助動詞＋尊敬の補助動詞
(ii)　尊敬動詞＋尊敬動詞
(iii)　尊敬動詞＋尊敬の助動詞

「おはします（おはす＋ます）」「おぼしめす（おぼす＋めす）」などの語も(ii)の例の一種である。

ただし、会話文や手紙文では、身分にかかわりなく、二重敬語が用いられる場合があるので、文種には注意が必要である。

●二方面への敬語　一つの動作に対して、種類の違う敬語を重ねて用い、それぞれ敬意の対象が異なる二方面に同時に敬意を表す場合がある。敬語を重ねる順序には次の三通りがある。

(i)　謙譲語＋尊敬語（謙譲語＋謙譲語＋尊敬語の場合も）
(ii)　謙譲語＋丁寧語
(iii)　尊敬語＋丁寧語（尊敬語＋尊敬語＋丁寧語の場合も）

敬語が用いられている時はこの例に限らず、「誰が」「誰を（に）」を正確に捉えることが大切だが、この二方面に対する敬語の(i)の例では特に人物関係を明らかにしておくことが理解を助けることになる。

●絶対敬語　天皇・上皇・皇后・皇太子など、身分の高い特定の人物に対してのみ用いられる敬語を絶対敬語という。動詞としては「奏す」（「言ふ」の謙譲語／天皇・上皇に用いる）「啓す」

（「言ふ」の謙譲語／皇后・皇太子などに用いる）などがあり、名詞としては「行幸」（天皇の外出）「行啓」（皇后・皇太子の外出）「御製」（天皇が詠んだ和歌など）などがある。

また、天皇などの高貴な身分の人が、会話の中で、自分の動作に尊敬語を使ったり、相手の自分に対する動作に謙譲語を使ったりして、自分を高めることがあり、これを自敬表現（自尊敬語）という。

2 音便

発音の便宜のために、単語のうちのある音が変化することを音便という。音便には、イ音便・ウ音便・撥音便・促音便の四種類があり、それぞれの品詞によって、種類や現れる活用形が決まっている。

●イ音便

動詞　カ行・ガ行・サ行の四段活用の連用形に「て」「たり」が続くとき
形容詞　連体形に体言や助詞「かな」などが続くとき
助動詞　「べし」「まじ」の連体形に現れる

●ウ音便

動詞　ハ行・バ行・マ行の四段活用の連用形に「て」「たり」が続くとき
形容詞　連用形に用言や助詞「て」「こそ」が続くとき
助動詞　「べし」「まじ」「まほし」「たし」の連用形に現れる

●撥音便

動詞　バ行・マ行の四段活用およびナ変の連用形に「て」「たり」が続くときやラ変の連体形に「めり」「なり」が続くとき
形容詞　連体形に助動詞「なり」「めり」「べし」が続くとき
形容動詞　ナリ活用の連体形に「なり」「めり」「べし」が続くとき
助動詞　「ず」「たり」「べし」「まじ」「なり」の連体形に「めり」「なり」が続くとき

●促音便

動詞　タ行・ハ行・ラ行の四段活用およびラ変の連用形に「て」「たり」が続くとき

音便は必ず起きるわけではないし、発音の便宜のためといっても現代の我々から見ると違和感のあるものもある。しかし、音便を正しく捉えないと活用が分からず、語そのものの理解に支障が生じる場合も出てくる。音便を学習することを目的にするのではなく、正しく語を捉える観点から学習させたい。さらに、撥音便については古文では表記されない場合が多くあることにも留意したい。例えばラ変「あり」に助動詞「なり」が付いたものは「あんなり」と撥音便化するが、しばしば「あなり」と表記されるのである。慣れればおおよそ決まったところに出現するので簡単に見分けられるようになるが、初めは丁寧に読み取りたい。また、動詞が音便化する際に接続助詞の「て」が濁音化することがあるので注意する。例えば、「急ぐ」＋「て」が「急いで」、「飛ぶ」＋「て」が「飛んで」となるのがそれに当たる。

（畠山　俊）